第1回（2020年4月23日）

2020年度

現代中国論Ａ

ー 鄧小平時代から習近平時代へ ー

担当：諏訪一幸

1

＜中国理解のポイント＞

１．中国共産党の指導
（１）中央集権（党国家体制）
（２）戦略的思考の重視
（３）常に自己を正当化
２．社会主義
（１）確固たる歴史観
（２）共産主義（社会主義の最高段階）が理想郷
３．番外編「6.4天安門事件」

2

＜授業スケジュール：第二回＞

１．毛沢東時代（1949-1978年）の中国
２．前期鄧小平時代（1978-1992年）の中国
（中国（近）現代史Ｂ対象は1992年まで）
３．建国70周年記念行事（2019年10月1日）から
わかること

＜授業スケジュール予定：第三回以降＞

Ⅰ．後期鄧小平時代（1992年～2012年）

１．江沢民時代（1992年～2002年）
ー　変容する社会主義国家
（１）社会主義について
（２）党大会の開催と方向性
（３）新たなイデオロギーの模索
（４）「韜光養晦」と中国外交
（５）激変する社会と法輪功事件
（６）高度経済成長と朱鎔基改革
（７）進む台湾化と両岸関係の緊張

２．胡錦濤時代（2002-2012年）

ー　九龍治水の集団指導体制

（１）導入

（２）党大会の開催と方向性

（３）継続性を保証する/強要する制度設計

（４）経済大国中国の誕生

（５）社会の不安定化と調和社会の提起

（６）事例研究：薄熙来（はく・きらい）事件

（７）強硬外交への転換

（８）両岸関係は対立から改善へ

5

Ⅱ．習近平時代（2012年-2037年？）

ー　大国復興への野心

１．党大会の開催と方向性

２．習近平戦略の提起　ー　継続性よりも独自性

３．権力の掌握１：腐敗撲滅闘争で異端分子排除

４．権力の掌握２：

大規模な組織再編で既存組織を形骸化

５．「核心」の誕生と抵抗

６．「中国の特色ある大国外交」

７．遠ざかる香港と台湾

８．習近平政権への評価と今後の日中関係

6

第1回（2020年4月23日）

現代中国論Ａ

番外編：「6.4天安門事件」

7

＜テーマ＞

「6.4天安門事件」と中国の大国化

問いかけ

現在ある中国の繁栄と大国化は、
「弾圧があったからこそ？」

8

１．「6.4天安門事件」（6.4事件）とは
（１）北京市中心の天安門広場を占拠する学生らを排除するよう党が軍に命じたことで起こった大量虐殺事件
（２）大学生や市民らが多数死傷
（３）共産党指導部内での意見対立が背景

２．1980年代後半の中国
（１）一般的社会状況
①党・政府官僚の不正に対する不満
②インフレに対する不安

（２）大学生をとりまく状況
（講師は当時、北京大学留学中）
①現状（知識人に対する低待遇）への不満
②将来（卒業後の進路）に対する不安
③政治的無関心の一方で、エリートとしての使命感
→　活発な言論活動と「節目の年」
→　建国、「5.4」運動、仏革命

３．アクター

（１）党指導者

①鄧小平（中央軍事委員会主席。最高指導者）

②趙紫陽（総書記。形式上の最高指導者）

③胡耀邦（前総書記。1987.1失脚。1989.4.15急死）

＜指導者の上下関係＞

党序列一位	党総書記（趙紫陽）
二位	国務院総理（李鵬）
三位	党中央紀律検査委員会書記（喬石）
平党員	中央軍事委員会主席(鄧小平)

鄧小平（1904-1997）：改革開放の総設計師

1952年に副総理、56年に総書記、66年に文化大革命で失脚。73年に副総理等で復活、76年に第一次天安門事件で失脚。77年に副総理等で再度復活。78年の11期3中全会で最高指導者に。81年に党中央軍事委員会主席（～89年）。6.4事件鎮圧の最高責任者。92年に南巡講話（高度経済成長の号令）

趙紫陽（1919～2005）

1980年に総理、87年に総書記。87年10-11月の第13回党大会で、大胆な政治体制改革実施を主張。89年6月の13期4中全会で、6・4事件に際し、「動乱を支持し、党を分裂させるという罪を犯した」ことを理由に、総書記解任。その後、2005年1月に死去するまで、ほぼ自宅軟禁

胡耀邦（1915～1989）

組織部長時代（1977.12-78.12）に、多くの知識人や幹部の名誉回復を実現。1981年、党のトップに就任（当時は主席、翌年、総書記に）。1987年1月の「政治局拡大会議」（党規約には言及のないイレギュラーな会議）で、「集団指導の原則に反し、重大な政治的原則上の誤りを犯した」として、総書記の辞任を申し出（実際は解任）、政治局委員に二ランク降格

（２）大学生
①当局（党政府）と向かい合う最大のアクター
②当局側にいくつかを要求
→　胡耀邦の名誉回復
→　「動乱」の位置づけ取り消し
→　こられ実現のための、当局との対話
（３）市民
①知識人
②北京市住民（都市部、郊外）
③北京市以外の人々
（４）人民解放軍
→　共産党の軍隊としての解放軍

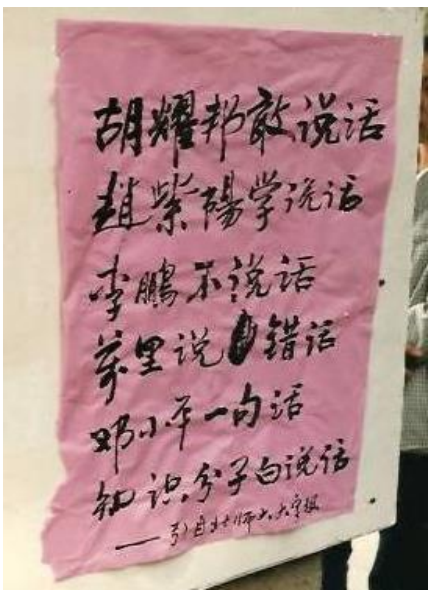
15

ドキュメンタリー映画『天安門』
（1995年。アメリカ）

16

北京大学キャンパス内に設けられた祭壇（4月中旬）

17



キャンパス内掲示（指導者評価。４月下旬）

18

学生デモ行進（４月２７日）

19

胡耀邦遺影（人民英雄記念碑。４月下旬）

20

歩行者天国となった長安街（４月下旬）

21

厳家其（趙紫陽のブレーン。５月上旬）

22

天安門広場（５月上旬）

23

学生を支持する政府関係者（５月中旬）

24

小瓶（鄧「小平」。５月中旬）

中南海新華門前（５月中旬）

路上のバリケード（５月中旬）

27

戒厳令発動日（５月２０日）の天安門広場

28

戒厳令発動日（５月２０日）の天安門広場上空

李鵬総理の党籍剥奪を求めるデモ隊（５月下旬）

「６・４」直後の人民英雄記念碑階段（６月中旬）

31

軍用車両のキャタピラ跡（天安門広場。６月中旬）

32

４．結末
（１）共産党とその統治の本質が明確に
（２）弾圧によって運動崩壊。主な指導者は
海外亡命
（３）当局発表で死者は319名。実態は不明
（４）先進国をはじめとする制裁により、国際
社会で孤立

５．学生運動への評価
（１）肯定的
①自発的
②「五四」運動（民主、科学）を継承
（２）否定的
①「民主化運動」の一言での総括は誤り
→　「劉暁波」は少数派
②「指導部」の力量不足
③大衆との広範な連帯を求めないエリート
意識

６．6.4事件後の中国

（１）政治：共産党統治のさらなる強化へ

①党は統治の一層の強化へ

②弾圧の張本人は鄧小平。しかし、「南巡講話」で、人々は鄧小平を「許す」

→　許したのはなぜ？

（２）経済・社会：弱肉強食の競争社会へ

①第二の経済大国へ（2010年）

②経済格差の発生と拡大

③深刻な環境破壊（例えば、PM2.5）

④モラルの低下（例えば、権力欲、金銭欲）

（３）外交：周辺外交の展開と大国化

①「意図せざる結果」として、外交の幅が拡大

②高度経済成長と軍事力強化を背景に、外交姿勢はますます強硬に

↓

「6.4事件で欧米式政治改革への希望を圧殺、
南巡講話で大胆な経済改革を呼びかけ」。
鄧小平と改革開放政策に対する評価は、
包括的な「セット」で行う必要あり？

37

再度問いかけます

現在ある中国の繁栄と大国化は、
「弾圧があったからこそ？」

38